嘉庫　嘉悦大学学術リポジトリ　Kaetsu

University Academic Repository

"The Historical Study for ""B"" movie in Hollywood"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kobayashi, Norio メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/164

ハリウッドにおける「B級映画」の史的考察

The Historical Study for "B" movie in Hollywood

小　林　憲　夫

Norio Kobayashi

<要　約>

本来の意味をそれほど深く理解していないにもかかわらず安易に使用している言葉はたくさんあるが、映画を評するときにしばしば用いられる「B級映画」という表現もそのひとつであろう。この表現は多くの場合、「安っぽい映画」、「くだらない映画」、「いまいちの映画」、「駄作」など低い評価を表わすために用いられるが、その定義は人によって異なり、事実上かなり曖昧に使われている。本論文は、「B級映画」の語源はどこにあるのか、そしてこの用語は本来どのような場合に用いられてきたのかを考察する。

映画は19世紀末にフランスで発明されたが、現代に見るような大規模なエンターテインメントとして発展してきたのはアメリカ合衆国である。「B級」という表現は、その米国における映画製作の工程から生まれてきた。本論文における「B級映画」は、米国での映画の誕生からハリウッドの歴史を追い、第二次世界大戦後のテレビ時代を迎えるまでを辿っている。これにより「B級」映画の成立事情と変遷を述べ、「B級」映画がどのように時代とともに変化してきたかを明らかにしている。

<キーワード>

B級映画、MMPC、映画裁判、エディスン、ハリウッド、スタジオ・システム、ロジャー・コーマン、純B級映画、新B級映画、テレビ放送、

1．はじめに

世間一般で用いられている言葉において、本来の意味をそれほど深く理解していないにもかかわらず安易に使用している言葉はたくさんある。私自身、明確な意味を理解しないで口外している単語や外来語はいくつも思い当たる。そのひとつに「B級」映画という表現がある。映画を評するときに、B級という言葉は広く一般的に使われているだろう。この表現は多くの場合、「安っぽい映画」、「くだらない映画」、「いまいちの映画」、「駄作」など低い評価を表現するために使われているが、実はその定義は曖昧で、人によってB級映画の解釈

は大きく異なる。

今日における「B級映画」とは、どのような映画であろうか。「B級映画」と「A級映画」の違いは何であるのか。これに関して現在出版されている辞典類を調べてみたが、ほとんどの辞典には「B級映画」という言葉すら記載されておらず、意外にも用語として確立されていないことが分かる。「B級映画」が載っていた数少ない辞典のひとつ「Imidas イミダス 2005」は、B級映画は『二本立ての添え物として、トリをとるA級作品よりも格下のスタッフ、俳優を使い、セットもA級作品のものを流用したりして短期間に低予算で作った映画のこと。』とある。しかし短期間、低予算という比較表現では明確な定義とはなりえない。また撮影期間や予算で線引きするならば、映画は製作時点でA級B級が決まっていることになるのであろうか。

映画は19世紀末にフランスで発明されたが、現代に見るような大規模なエンターテインメントとして発展してきたのは米国である。その米国における映画の製作工程のなかからA級、B級という区別が生まれたことは明白であり、本論では米国合衆国（米国）の映画史を中心に研究を行なう。すなわち本論文における「B級映画」は、米国で製作され発表された映画が対象となる。本論ではハリウッドの歴史を追いながら、次にB級映画の成立事情について調査し、現代にいたるまでの「B級映画」の変遷を追い、B級映画自体がどのように時代とともに変化してきたかを述べる。最後にこれらを総括し、歴史的観点から「B級映画」の定義についての考察を行なう。

なお本論文は、駒沢女子大学映像コミュニケーション学科の私のゼミ生である星寛子から多大な貢献を受けている。改めて感謝を述べたい。

2．ハリウッド前史

2．1．映画の誕生

映画の発明は今から100年以上前になる。映画につながる技術は19世紀後半からフランスや米国、ドイツなどで多くの人によって研究されてきた。それは、トマス・エディスン（Thomas Alva Edison・1847-1931）のキネトスコープ（Kinetoscope・1889）であり、リュミエール兄弟（Auguste Marie Louis Lumière・オーギュスト・1862-1954、Louis Jean Lumière・ルイ・1864-1948）が発明したシネマトグラフ（Cinematographe・1894）である。

初めはイギリス人のウィリアム・ケネディ・ローリー・ディクスン（William Kennedy Rolly Dickson・生没不明）が1889年に未完成の映写装置の実演をおこなったり、1880年代後半にフランス人のルイ・エーメ・オーギュスタン・ル・プランス（Louis Aime Augustin Le Prince・1841-189?）とイギリス人のウィリアム・フリーズ＝グリーン（William Friese Greene・1855-1921）の二人が実用可能なポータブル・カメラ（映写機のシステム）を開

発していたが、それ以上の発展はなかった。

一方、エディスンは米国でキネトスコープを発明した。これは、簡潔にいうと活動写真の撮影・映写機である。連続撮影したフィルムを早送りすることで動いてみせる仕組みはここで実現され、ひとコマずつ表示する「コマ送り」システムすら採用されていた。しかしエディソンは特許を申請する際に映写幕（スクリーン）を使用する可能性を盛り込まなかった。そのために、「映画の発明家」の栄誉はリュミエール兄弟に輝いたのである。1895年にリュミエール兄弟は彼らが撮影したフィルムの一般公開をおこなった。それは1本の上映時間が1分にも満たない12本の短編フィルム「工場の出口」（Exiting The Factory：1895）や「列車の到着」（Arrival of a Train：1895）であったが、暗くした室内でスクリーンに映像を投影するという今日まで至るスタイルはこのときに始まり、この年が映画の誕生の年となった。

2．2．エディスンの挑戦

それを追うように4ヶ月遅れて、エディスンも複数の観客のためのスクリーン上映を行っている。ここまでは米国における最初の上映でしかないが、エディスンの功績は「映画の製作」を、当時のフランスのように家内生産的手工業としてではなく「ビジネスプロセス」として考えたことにある。彼は映画製作の流れが、上流から下流まで一貫して繋がっているスタジオが存在しない不完全なものあることに着目し、これをシステムとして分業化するアイディアを思いついた。まずエディスンは1893年に、世界で初めての撮影スタジオ「ブラック・マライア（The Black Maria）」をニュージャージーに建設し、トータルな映画製作を可能とする体制を構築するとともに、映画製作に関わる利権をすべて自分のものとして利益を手中に収めようと次々に裁判を起こしたのである。

映画裁判の始まりは、エディスンによる特許権についての訴訟であった。1897年からモーション・ピクチャー・パテント・カンパニーが設立する1908年までの約10年が映画史上の最初の訴訟であると言われる。この訴訟は、エディスンと独立系の映画製作会社によって起こされ、1902年にニューヨーク南部地区にある米国連邦高等裁判所が、エディスンが映画技術の全ての面において特許権を持つという彼の主張を覆す決定を下すまで続けられた。しかしそれ以降も、エディスンは特許にこだわって訴訟を続け、映画に関しての大部分の主な特許を所有していると主張したのである。

「1897年、彼（エディスン）は自分の権利を不当に利用している者たちを相手どって、長期間にわたる一連の訴訟を開始した。」[1)]

しかしこうした動きは、エディスンと同時期に映画に関する発明を行った技術者たちも刺激することになった。

「エディスンに裏切られたと感じたアーマット[2)]もまた訴訟を起こした。バイオグラフ社[3)]はいくつかの重要な独自の特許を保持していて、反訴の準備にとりかかった。全部で500件を超える訴訟が映画産業史の最初の10年間に起こされた。」[1)]

1908年にニッケルオデオン(Nickelodeon)が主流になると、機材の製造、映画の制作、配給、そして興行と、鎖の最後のつながりがここに完全となった。映画はこの時点で、巨大な利権の源泉としての性格を明確に持つようになったのである。

「1908年までには全米で5000軒以上もの“ニッケルオデオン”が存在することになった(“ニッケル”、すなわち5セント銅貨は当時の入場料を表し、“オデオン”は音楽や劇を上演する小さな建物を意味するラテン語からきていた)。だが、このシステム全体を握る会社も個人もまだ存在していなかった。」[1)]

裁判闘争の停滞を感じていたエディソンは、時期を逸することを恐れ次の手に出た。それがMMPCである。

2.3. MMPCの登場

エディスンによる10年近くにわたる映画裁判を解消させたのが、モーション・ピクチャー・パテント・カンパニー(Motion Picture Patents Company：MMPC)の設立である。当時の大手映画製作者や映画関連機器製造業者、フィルム製造業者ら10社は、各自が特許をめぐって争うよりそれを他人に渡さないようにすることが得策であり、すでに映画産業はそれだけの規模を持っていると認識するようになった。そこで彼等は1908年に、それぞれの特許を持ち寄って管理する会社を設立した。それがMMPCである。この10社は、エディスン(Edison)、バイオグラフ(Biograph)、ヴァイタグラフ(Vitagraph)、エッサネイ(Essanay)、シーリグ Selig、ルービン Lubin、カーレム Kalem、メリエス(American Star)、それにパテ(American Pathé)という9つの製作会社に、ジョージ・クライン(George Kleine)の配給会社を加えた独占組合であった。歴史上MMPCは単に「パテント社」と呼ばれることが多いので、以降はこれに習うことにする。

パテント社は、映画の利益を独占することで合意した組織であり、組織内ではすべての特許が共同利用され、各社の特許を一括管理することでカルテルを結成したのである。これに基づきエディスンは、製作されるあらゆる映画から特許料を徴収し、ジョージ・イーストマン[4)]にこの会社にだけ生フィルムを供給するように同意させたのである。

さらにこのカルテルを有効にするため、パテント社以外が製作した映画を扱う配給業者にはパテント社の映画の配給は許されなかった。そこで大部分の配給業者はまもなく彼ら自身のトラスト、ゼネラル・フィルム・カンパニー(General Film Company)を結成し、パテント社への対抗を試みた。さらにその中から独自に映画を制作しはじめるものが現れ、これが後の独立系の製作会社の原点となった。しかしフィルムを押さえるパテント社の力は強く、これに対抗するには次の裁判を待つしかなかった。

2.4. 映画裁判

映画産業史の最初の10年間に行われたエディスンによる一連の特許訴訟を「第一次10年

裁判」と名づけるとすれば、「第二次10年裁判」とも呼ばれるべき裁判が、今度はパテント社に対して起こされた。これが通称「映画裁判」とも呼ばれるものである。「映画裁判」と言われるものは、エディスンによる映画の権利についての一連の裁判と、パテント社に対する反トラスト裁判の二種類があるが、本論では反トラストをめぐる裁判の重要性を鑑み、後者の係争を映画裁判と呼ぶ。この映画裁判は、1890年に施行された独占禁止法（シャーマン・アンチ・トラスト法・the Sherman Antitrust Act）[5] により、パテント社の活動が独占資本によるカルテルに当たるとされた裁判である。

「反トラスト訴訟が特許訴訟に代わってあらわれ、米国の映画産業は新たな裁判10年戦争に突入していった。」[6]

パテント社の設立以降、これが反トラスト法違反と指摘され、パテント社が消滅するまでの10年間訴訟が続けられた。この映画裁判は、パテント社の映画産業の独占に対する独立系制作会社の訴訟でもあったので、これに対してパテント社側は、パテント社に参加しない映画関連業者に対して高額の特許料を請求してきた。参加が認められなかった中小企業の製作者らは一斉にこれに反発し、特許料を払わずに買えるヨーロッパ製の機器やフィルムを使って撮影を続行していた。しかしさらに、パテント社側は違反者を片端から摘発し、参加しない企業の映画撮影・上映を妨害するという手段に出てきた。そこで、独立系の製作者は妨害を避けるためにパテント社の目のとどかぬ土地に出かけて映画を製作する必要に迫られた。その場所こそがハリウッドである。

結果として、パテント社は1912年に反トラスト法違反であると指摘され、1915年には連邦裁判所で反トラスト法違反であるとされた。1915年10月15日に、パテント社の解散を宣言する最高裁判所の判決が下された。しかしすでにその頃には、活発に映画の撮影・営業活動をしていたインディペンデントの映画会社に押され、パテント社の力は衰退していた。1917年4月9日に最高裁から新たに有罪宣告されたパテント社は、映画製作者、配給業者、興業者からの納付金を受け取ることをすべて放棄させられ、1917年以降すべての活動を停止し、1919年には解散を宣言した。しかし巨大な利権である映画産業における「独占」はこれで終わったわけではない。新たな独占がすでに芽生えていた。それがハリウッドである。

3．B級映画の誕生

3．1．東海岸から西へ

映画の都・ハリウッドは、米国合衆国の西海岸のカリフォルニア州ロサンゼルスにある世界的な映画産業の中心地である。ハリウッドは1920年から1940年代にかけて映画の都として君臨した。また映画の祭典のひとつである、アカデミー賞（The academy awards）授賞式がおこなわれるのもロサンゼルスである。その賞に選考される対象作品はロサンゼル

ス地区で上映されたものに限られており、世界を代表する映画賞に対してのハリウッドの影響は非常に強い。初のアカデミー賞授賞式はハリウッドのルーズベルトホテル（Hollywood Roosevelt Hotel）にて1929年に行われ、米国映画界の発展とともに世界で最も権威ある映画賞へと育っていった。

その地でもともと映画製作が行われていたわけではない。1922年の当初、郊外の町であったハリウッドには劇場や寄席は1館もなく、定員600名の小さな映画館が3館あるだけしかなかった。ハリウッドに移る以前は、20世紀初頭の映画の中心地は東海岸のニューヨークとシカゴであった。1893年にシカゴで行われた万国博覧会にキネトスコープが出品されたことや、1894年にニューヨークのブロードウェイ1155番地に世界初の映画館「キネトスコープ館」が開かれたことなどから東海岸側が米国における文化や経済の中心地となり、また、東海岸側が映画・映像産業の中心地であったことが伺える。

映画製作がハリウッドに移った理由は大きく二つあるとされる。ひとつは映画に不可避ともいえる、利権をめぐる争いである。当時ニューヨークやシカゴはワスプ（WASP・White Anglo-Saxon Protestant 白人でアングロサクソン系のプロテスタント）が支配していた。その中で映画が登場してその人気に目をつけたのは、ユダヤ系移民であった。長年、他民族の中で暮らしてきた彼らは生き延びるために人間観察に長けていたようで、映画の可能性を見抜き、そして映画業界に乗り込んだのである。彼らの活動地は、最初はやはりニューヨークやシカゴであったが、次第に映画全体を自分たちのコントロール下に置こうとして、ワスプと衝突するようになり新たな場所を探す必要が生じてきた。

もうひとつの理由はたぶんに技術的な問題である。映画の撮影は、最初は東海岸で行われていた。しかし東海岸は天候条件が悪く、基本的に明るいところでしか撮影できない当時の映画には不向きであった。フィルムは感度が悪く、撮影にはより強い光が必要であったし、電球（照明）は映画撮影に使えるような明るさにまだ達していなかった。すでに述べたエディスンが1893年につくった世界で初めての撮影スタジオ「ブラック・マライア」は、真っ黒なタールで覆われ、天井の一部に大きく口が開いている。エディスン研究所の庭の小屋である。小屋全体が円のレールの上に乗っていて、太陽の動きに合わせて小屋を移動し天井を開いて採光した。研究所のあるニュージャージー州は経緯を日本に移せば青森あたりに位置し、光は極めてやわらかいものであったからである。

3．2．ハリウッドの誕生

日が長く年間を通じて天候のよいカリフォルニア州は映画撮影には最適の環境と言えた。中でもロサンゼルス一帯は気候もよく、ゴールドラッシュ以降住み着いた人々が安価な労働力となっており、あらゆる映画の撮影に適していたために映画人が集まりはじめた。この地はメキシコにも近く、パテント社側の追っ手がやってくることを察知して国境を越えて逃げることができるという利点があった。ユダヤ系の資本家たちにとって、ワスプの映画資本の

力が及ばないという大きな魅力もあった。パテント社の人間の目が届かず、豊かな光のある地を求めて、彼等はカリフォルニアに移動したのである。

「ロサンゼルスを中心とした地域は豊かな陽光、温暖な気候、著しい対照をなす多様な地形、つまり映画制作の環境に恵まれると同時に、魅力的な労働力のたまり場でもあった。」[7)]

東部からやってきた人々がハリウッドで映画を撮り始めたのは、1907年頃からといわれている。最初のハリウッドでの映画スタジオは1911年にネストール社（ナスター・フィルム Nestor Studios）が建てたものであり、同じ年に、さらに15のスタジオが建てられた。これが映画の一大王国のはじまりであった。1918年までには70もの撮影所ができ、ハリウッドに撮影所の建設が進んでいったのである。この年にはすでに世界の映画の約80パーセントが、ハリウッドで製作されるようになっていた。まさに、ハリウッドは映画制作の理想的な土地であった。ニューヨークにあった映画会社も続々とハリウッドに移転してきた。ユダヤの血を引いた資産家達がハリウッドに有名なスタジオを建てるようになった（メジャー・スタジオの創設者はみなユダヤ系である）。

1913年に「スコウ・マン the squaw man」（監督／セシル・デミル Cecil B. De Mille）の撮影がカリフォルニアで行われた。これが、ハリウッドロケ第一作である。そして、ハリウッドが映画の中心地になっていくのと同じ頃に、スタジオ・システム（Studio System）が成立した。スタジオ・システムとは、メジャー・スタジオが制作部門、配給部門、劇場（興行部門）を管理して、映画の制作から配給、上映まで全てのプロセスを支配するシステムのことである。これにより映画製作の流れがスムーズになり、より完成度の高い映画ができるようになったが、その一方でメジャー6社による映画支配が確立され、中小の映画制作会社は独立した存在でいることは難しくなった。

3．3．B級映画の誕生

前置きが長くなったが、映画産業がハリウッドに移り多くの撮影所ができたと同時期に、「B級映画」という言葉も生まれた。このときの「B級映画」の言葉の発祥は、その撮影所の場所からきている。1930年代までにハリウッドのメジャー支配はほぼ完成し（アカデミー賞が始まったのは1929年である）、そのひとつにフォックス（Fox）社があった。1930年代までフォックス社の撮影所は二箇所あり、ウェストウッズ・ヒルズの撮影所が「A地域」、ウェスタン・アヴェニューの撮影所が「B地域」と呼ばれていた。「B地域」のウェスタン・アヴェニューの撮影所では、比較的低予算の作品を製作していたために製作費の安い作品は「B地域の作品」（Area-B Picture）と呼ばれ、この呼称がやがて「B映画」（B Picture）と変化していったのである。

さらに低予算映画のイメージが定着した原因は、やはりメジャーのひとつであったユニヴァーサル・ピクチャー（Universal Picture）社が、1930年からの4年間に低予算でシリアル[8)]と西部劇を量産していたことが最大の理由であろう。この時代のユニヴァーサル映画社は低

予算映画の代名詞ともなった。量産により「B級映画イコール低予算映画」という概念が完成した。つまり、フォックス社の『B地域の撮影所』で撮られたものだったために『B映画(B-Pictures)』と呼ばれ、それがユニヴァーサル社の低予算作品群と結びついて『B級映画』と転じていったと思われる。英語では「B級映画」は「B class picture」と直訳されている事典もあるが、ほとんどのものが「B-movie」と表記している。これを見ると「B級」とランクを示す「級（クラス)」を使用しているのは日本での現象であり、米国では本来ランク分けと呼称とは無関係なことがわかる。「B地域の作品は予算が少ない」から、「B級映画は低予算である」それが転じて「低予算の映画はB級である」と考えられるようになったのではないだろうか。

他方、ユニヴァーサルが低予算を量産しているのに対して、各メジャーの撮影所はそれぞれ独自のスタイルを発展させていた。メジャー各社は生き残りのために特色を出すようになったが、ユニヴァーサル社とフォックス社が大量に映画を製作することで予算単価を削っていた中、メトロ・ゴールドウィン・メイヤー（Metro Goldwin Mayer：MGM）社は作品に高級感を持たせることと、程よい知的教養のある人々向きの題材のものを製作していた。1939年の大作「風と共に去りぬ」は、独立製作ではあるが、メトロ・ゴールドウィン・メイヤーを通して公開されたものであり、メトロ・ゴールドウィン・メイヤー・スタイルの典型となった。一方、パラマウント（Paramount）社はヨーロッパ的な題材や構想を用い、リパブリック（Republic）社は西部劇を専門に、ワーナー・ブラザーズ（Warner Brothers）社はロケーションで映画を撮ってリアリズムの名声を得ていた。

3．4．B級映画の商業化

メジャー各社はそのカラーを強く出すため、他社との差別化を明確にし、そのひとつとして低予算映画を「B映画」としてレベル的に低く評価する態度もとった。しかし「B映画」は次第に当時の映画産業にとって大きな役割を持つようなった。それ以前の米国の劇場では、フィーチャーと呼ばれる長編一本に短編を何本か付けて番組を編成していた。すなわちフィーチャーと短編よりも長い映画つまり中編のセット上映であった。しかしその形態は、30年代になるにつれてほとんどなくなっていった。1931年にニュー・イングランドで、フィーチャー[9]を二本立てで公開する試み（ダブル・フィーチャー）がはじまったからである。すなわち1933年に大恐慌がピークに達したころ、フィーチャーの二本立てが急速に浸透し、1935年には米国では全国的に二本立てが行われるようになった。その結果、B映画はフィーチャーの前座として上映される映画、いわゆる「添え物映画」として不可欠なものとなったのである。

「1929年から、始まった大恐慌は、映画興行の形態を変えた。フィーチャーを、二本立て上映して、暇をもてあましている映画ファンのニーズに応えたのである。“この不景気に映画どころではない”と考えるひとがいる一方で、“映画でも見て世の憂さを忘れたい”と考

えるひとがいた。（中略）食事にこと欠く状況では、映画まで気が回るわけでもないが、現実には失業して時間をもてあますケースのほうが多かった。映画ファンは、むしろこれまで以上にファンになった。」[10)]

30年代から40年代にかけて、メジャー（パラマウント Paramount Pictures、ユニヴァーサル Universal Studios、20世紀フォックス Twentieth Century Fox Film、メトロ・ゴールドウィン・メイヤー Metro Goldwyn Mayer Inc.、ヴァイタグラフ Vitagraph、ユナイテッド・アーティスツ United Artists）の周辺にいくつかの小規模の製作会社、いわゆる「貧乏通り」[11)]の会社が存在していた。これらの会社は主に「添え物映画」を製作しており、「インディペンデント」（Independent）と呼ばれた。インディペンデントには、映画上映のスタイルが二本立てになったため、メジャーだけでは全部の本数をカバーしきれなくなった不足分を埋める役割を負わされることになる。すなわち公認のB級映画製作専門の会社というわけである。メジャーは「添え物映画」をB級映画として区別することで、インディペンデントの存在を容認するようになったのである。

「そのなかのいくつか、たとえばリパブリック（Republic）やモノグラム（Monogram）などは“B級”映画を専門にしており、二本立ての添え物用映画に恰好の場所を探しあてた。」[12)]

大恐慌を機にB級映画の活躍の場は増えた。その一方で、世界情勢が映画産業に大きな影響を与えつつあった。すでに1914年には第一次世界大戦がはじまり、それまでの映画マーケットの大半を占めていたヨーロッパは戦火の中で映画製作どころではなくなった。これに乗じたハリウッドは、1920年代に盛んに映画をつくり世界の映画市場を制覇していったが、それに対しヨーロッパ諸国は米国映画に対する海外市場の封鎖を行った。イギリスなどの諸外国が輸入に対して高い税率を掛けはじめ、フランスは米国映画に対する比率をきめて、自国作品を制限したのである。これら海外市場における「封鎖」は、次第に作品の費用の償却を困難にし、米国は制作経費を切り詰めるしかなかった。

1939年に第二次世界大戦が勃発し米国が積極的に戦争に介入する事態になると、ハリウッドはさらに大きな影響を受けることになった。すなわち物価の騰貴を反映して映画の制作費が昂騰したのである。観客数も戦前に比べて減少していたが、それ以上に資材及び人件費の増大にもとづく制作費の膨張が問題であった。製作者たちはこの問題に対して様々な対策を練って対応した。例えば、できるだけオリジナル・ストーリーを活用したり、出演料の高いスターではなく新人を起用したりするというような対策をおこなった。これらの工作をはじめ、製作費に最も重大な影響を及ぼす撮影日数の問題を含めて、『低額予算』で映画を製作することがハリウッドの撮影所では当たり前のこととなっていた。その結果、ひと月に50本を製作するというシステムが当たり前になり、ハリウッドは再び利益を手にするようになった。B級の制作手法はハリウッドの柱になったのである。

4．新B級映画の登場

4．1．テレビ放送と映画

「第二次世界大戦中ハリウッドは繁栄を誇り、それが頂点を迎えた1946年には、興行収入総額は17億ドルに達した。ある意味で、この戦争は30年代に実用に成功していた商業テレビの導入を不可能にしたので、ハリウッドの映画工場が苦い現実（商業テレビの登場）に直面するのを遅らせもした。それに加えて、戦争はうまい具合にヨーロッパ諸国の競争力を弱めてくれた。（中略）第二次大戦は米国から多くの輸出市場を奪い、いくつかの小さな会社に痛手を与えたにしても、また同時にこれらの脅威を取り除いてもくれたのである。」[12)]

だが、低予算多作の「B級映画」に支えられてきたハリウッドの栄光も、長くは続かなかった。その最大の原因は、テレビの登場である。戦争が終わり人々が娯楽を求めるようになった1950年代のはじめに、商業用ではなく民衆のためのテレビが現れたとき、映画に与える影響は破壊的なものであった。

米国での本格的なテレビ放送は第二次世界大戦後であった。1948年から1952年の間にテレビ・ブームが興ったのである。それまでテレビ・セットは25万台しか使用されていなかったが、50年までには約400万台、52年には2100万台となり、米国のテレビ普及率は60%となった。1960年には普及率も米国の全家庭の87%をしめることになる（表「50年代米国のテレビ普及率」参考）。テレビの勢いを背景に、1940年代の映画は週に8000万人もの観客を導入していたが、50年代には6000万人と25%下回った。映画館も40年代には2万館あったのに比べて、50年代後半には5千館も減少したのである。

50年代米国のテレビ普及率 [13)]

テレビ受像機の普及台数（単位：百万台）		テレビ普及家庭（単位：百万世帯）
1947年	0.3	0.3
1949	4.0	4.0
1950	10.5	10.4
1952	21.0	17.3
1956	42.7	40.3
1958	50.3	43.0

source：Stations from FCC Annual Report;sets from Telecasting

しかし、撮影所はテレビに対抗しようと見当はずれの闘いをしていた。テレビと共存するのではなく敵対することしか考えられなかったのである。見当はずれの闘いとは、撮影所は倉庫の中に大事に貯蔵された大量の映画を利用することを拒み、保管料を払うことよりも古い映画の廃棄を優先していたことだ。映画業界は、テレビに比べれば比較にならないほどの莫大な費用をかけた大量生産という昔ながらの方法に固執し、映画が劇場用と同じようにテレビ用に簡単に生産できるメディアという可能性を見出せずにいた。

これにより、逆にテレビ会社が発展する時間的余裕を与えてしまい、メジャーを中心とする撮影所の形勢はしだいに不利になっていった。これにともないB級映画もまた衰退していったのである。1950年代の中頃までには、“プログラマーズ”（プログラム・ピクチュア program・picture＝B級映画）を求める市場はほとんどなくなり、そこに作品を供給していたこれらの会社が次々と倒産するようになった。B級映画は1948年から徐々に生産されなくなった。1948年を境にB級映画はいったん滅亡したのである。しかし、今日でもそれ以降につくられたB級映画（と呼ばれるもの）を見ることができる。

「アメリカン・インターナショナル映画や、60年代に主に若者向けの“エクスプロイテーション exploitation”[14] 映画を専門とするロジャー・コーマン[15] のニューワールドのような、低予算の独立製作会社にその位置を譲ったともいえる。」[16]

そこで、1948年以前に作られたB級映画を「純B級」[17] と名づけ、それ以降に作られたものを「新B級」として区別することにする。ここで再度、「純B級」映画がなぜ1948年に滅びたかについて検討してみよう。

4．2．純B級映画

「純B級映画」は、1930年代から1948年までに生産されたB級映画を指す。その特徴をまとめると、二本立て興行の前座であり、比較的低予算で製作されているものである。それが衰退した理由はテレビの影響もあるが、もうひとつの大きな原因があった。それはハリウッドメジャーによる映画産業支配、とりわけ上映劇場のチェーン化が崩れ去ったことである。既に述べたように、かつてパテント社やカンパニーの支配を嫌って西海岸に移動し自由な映画製作を目指したハリウッド各社は、1920年代を経て映画産業の利権規模が想像以上に大きいことを知り、自分たちだけで映画産業を独占しようと動き始めたのである。その結果メジャーが結成され、映画製作から上映までの系列化を進め、特に映画上映する劇場の支配を露骨に行うようになった。

ところがチェーンによる安定した二本立て形式が主流になってきたところで、今度は1946年に反トラスト法（独占禁止法）に基づく決定が、メジャーであるパラマウント社に対して下されたのである。それは同社傘下の劇場チェーンを分離するよう指示する命令であり、その効力は当然他の撮影所にも及んだ。撮影所は即座に控訴したが、1951年に承諾命令を受けたメジャー各社は、ついに興行部門を分離せざるを得ない状況に追い込まれた。これによりスタジオ・システムは崩壊したが、同時にこれはB級映画製作の役割を負っていたインディペンデントが映画の配給先をなくすことにもつながった。

「メジャー各社が手持ちの劇場チェーンを切りはなすと、純B級の製作も中止された。純B級には、チェーンを効率よく維持していくという役割があったので、チェーンがなくなれば御用済みになる。外様は、フリー・ブッキング[18] の時代になると、真っ先に排除される運命にあった。（中略）二本立ての興行形式は変わらなかった。もっとも、A級＋純B級

の組み合わせかが、A級の“豪華二本立て”にエスカレートし、A級の上映時間をもつ新B級が生まれた。」[19)]

安価な二本立て形式が消滅すると同時に、純B級映画は観客のニーズを失った。観客は豪華な二本立てを求めるようになり、いわゆる繋ぎのような役割の映画では満足しなくなったのである。この後、映画各社はテレビに対抗して劇場スクリーンのサイズを拡大し、莫大な費用をかける超大作の制作に走るようになった。そして純B級映画は消滅した。すなわち純B級映画は、1948年の反トラスト判決以降、遅くとも1951年までには姿を消したのである。

4．3．新B級映画の誕生

テレビは映画人口を大きく減らす原因となった。しかし同時に、新しい映画の登場も促すことになった。それは皮肉なことにテレビの普及がその理由である。50年代に入り、それまで戦争の影響によりテレビ普及率が伸び悩んでいた米国にテレビが急成長しはじめた。そのおかげで、今までの純B級映画がブラウン管に再登場するようになった。テレビ人気により、テレビの放送時間は徐々に延長していった。しかし、当時の番組制作能力は低く、フィルム番組で穴埋めしていくしかなかった。そこでテレビ局はハリウッド製の劇場映画の流用を考えたのである。

この案に飛びついたのが独立プロダクションであった。インディペンデントは倉庫で眠っていた作品をまとめて商品化したのである。ここに新たな「新B級映画」が登場した。新B級が誕生し、再びインディペンデントがB級映画を専門に製作するようになっていった。「新B級」と呼ぶ理由は、ここで登場するB級映画が今までの「純B級」映画に大きく影響を受けていたからである。そして、NBCがカラー放送を始め、劇場映画を有料テレビで見せるなど映画とテレビの距離は小さなものとなっていくにつれ、次第にインディペンデントのみでなく、メジャーの映画会社も作品をテレビ局に流用しはじめたのである。

テレビ界に映画を興業的にいち早く放出したワーナー・ブラザーズは、766作品の映画をテレビ局に譲渡した。インディペンデントはテレビ放映を前提としたB級映画を制作し、それをメジャーが追う形になってくる。そしてインディペンデントは「映画の登竜門」として監督志望者が殺到するようになるのである。ちょうどその頃に活躍したのがロジャー・コーマンだ。B級映画の巨匠といわれるコーマンは、1960年代から低予算の娯楽作品を大量に輩出した。コーマンは、自伝の中で次のように語っている。

「何本もの低予算キワモノ映画をつくったおかげで、わたしはやがて『B級映画の帝王』という呼び名をちょうだいすることになる。わたし自身は、一度もB級映画をつくった覚えがないのだから、おかしな話だ。（中略）テレビや最高裁の裁定や、金をかけたカラー作品への大衆の好みの変化によって、わたしが監督をはじめたころにはB級映画は消滅していた。B級ということばの正確な意味が知らせている映画業界では、わたしの作品を指して

そのことばが使用されたことはない。それをひろめたのはメディアだ。」[20)]

インディペンデントによるB級映画が登竜門として認識されはじめると、ロジャー・コーマンは帝王扱いされるようになった。実際にロジャーの下では、多くの一流監督が育成されている。たとえば、「地獄の黙示録」（Apocalypse Now：1979）を監督・製作したフランシス・フォード・コッポラや（Francis Ford Coppola）「イージー・ライダー」（Easy Rider：1969）のピーター・フォンダ（Peter Fonda）、デニス・ホッパー（Dennis Hopper）らがコーマン・スクール出身である。

4．4．新B級映画の衰退

ロジャー・コーマンは、「B級映画には二種類あり、一つは“トラディショナル”なものである」と言っている。彼の言う「トラディショナル」なB級こそ、「純B級」の映画であろう。そして、コーマンらのインディペンデントが製作し輩出している作品こそが新B級映画なのである。

しかし1980年代に入ると、新B級を輩出し潤っていたインディペンデントにも陰りが生じはじめた。それは、1980年代初頭に起きた市場の変化と、映画産業自体の変化、配給コストの絶え間ない上昇のためである。インディペンデントの路線は、映画館の客やペイ・テレビ市場の変化で以前ほど有効ではなくなっていった。インディペンデント製作のB級映画、つまりテレビ用のB級映画は急速に人気を失っていったのである。それはテレビのメジャー化、すなわちテレビ局が巨大な資本を持つようになり、局独自で番組を企画・制作する路線が拡大してきたからである。さらに、80年代末には急成長する家庭用ビデオのマーケットが登場し、テレビ番組が繰り返しの視聴に耐えうるだけの質を求められるようなったことも大きい。

「充分に宣伝された商業映画が70年代に大きな収益をあげたことが、商業劇映画の制作自体をこれまでになくテレビ産業に近づけていったのである。公平な眼で見れば、いまや映画はテレビの下位の範疇には入ると言ってもよいだろう。劇場公開用の映画産業は毎年約30億ドルの収益をあげているが、一方ネットワーク・テレビ産業はその3倍に及ぶ収入を得ている。1980年代には100本以上の、いわゆる“テレビ用”映画が制作されたが、劇場用長編映画の数はそれよりはるかに少ない。70年代のはじめのころまでなら、たいていの批評家や一般観客は“テレビ用”作品を劇場用映画に比べて明らかに一段階下のもの、無難すぎて面白みのないものと考えたはずである。」[21)]

テレビの普及・発達に伴い、テレビ用映画という枠がなくなってきた。今日放映されているテレビ映画は、テレビ用に最初から企画され製作された作品の比率が著しく向上し、新B級映画の余地は非常に少なくなっている。それは上記にあるように、視聴者にとってテレビ用映画がB級映画では満足できなくなってきたことから生じた問題であろう。マーケットが縮小することにより、テレビ用B級映画はさらに居場所を追いやられることになった。

5．今後のB級映画

「B級映画とは何か？」という問いを解決するために、B級映画の成立事情や、B級映画の分類を通して見てきた。そこで歴史的観点から見ていくと、次のような定義ができることがわかる。

B級映画とは……

・1948年以前では、二本立て映画の添え物用映画のことである。

・1948年以降1980年代まではテレビ用映画のことである。

そしてこれらに共通の条件が「低予算」である。しかしそれは劣悪な映画という意味ではない。低予算と短期撮影の映画は史上限りなく製作され、中には「燃えよドラゴン」（Enter The Dragon：1973）や「リトル ショップ オブ ホラーズ」（The Little Shop of Horrors：1960）のように、条件的には間違いなくB級でも、名作といわれ多くの人々に愛されている作品もある。

本論文では、1980年代までの「B級映画」について定義し、80年以降にはB級映画はテレビからも追いやられてしまったと述べた。しかし新しい「新B級映画」はすでに登場している。それは「ビデオ向けのB級映画」である。映画・テレビというメディア以外に、ビデオというマーケットが新しく出現したのだ。日本でも米国でも、1年間に製作される映画のすべてが上映されるわけではなく、上映する機会のなかった映画はビデオパッケージとして、VHSもしくはDVD化されて販売されている。映画の半数は劇場上映されていないのが現状であり、中にははじめからビデオ用映画として製作されるものもある。現代のB級映画のポジションは、そこに移りつつあると言えるだろう。

そして一方でB級映画自体の変容も著しい。たとえば1999年にニューヨークのセラキュースで創設されたB級映画の祭典「B-Movie Film Festival」は、オカルト的な映画を対象としている。90年代の大ヒットテレビドラマである「ツインピークス」（Twin Peaks）や「Xファイル」（X-file）などの劇場版がヒットするにおよび、現在の「B級映画」はカルト的な意味合いも多分に含んだマニアックな傾向すら帯びつつある。B級映画は今後も変性していくことには違いないし、映像マーケットがある限りB級映画は続くと言えよう。

注

1）pp 200　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983

2）アーマット　：Thomas Armat（1866-1948）かき落とし機構装置を発明したが、エディスンに強引に名義ごと移譲する契約をとりつけられた。

3）バイオグラフ社　：Biographエディスンと共同研究をおこなっていたウィリアム・ケネディー・ローリー・ディクスンが設立した会社。ミュートスコープなどを製造。

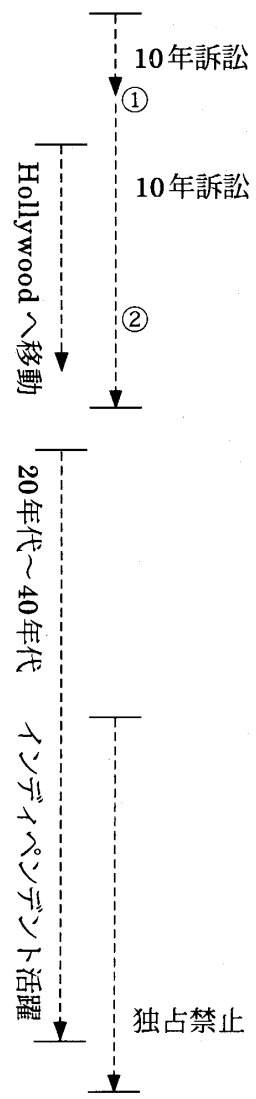
4）ジョージ・イーストマン　：George Eastman（1854-1932）彼はカメラのロールフィルムやカラー・フィルムを発明し、イーストマン・コダック社Eastman Kodak Companyを設立した。

5）シャーマン・アンチ・トラスト法　：1890年に施行された、企業の独占行為・協定を禁止する法律。第1条で州際または外国取引を制限するすべての契約、結合もしくは共謀を、第2条で州際または外国取引の独占、独占企画、独占目的のための共謀を違法とした。
6）pp 201　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983
7）pp 204　同上
8）シリアル　：映画やテレビの続きもの、連続ドラマ。冒険活劇やメロドラマに多い。
9）フィーチャー　：二本以上の映画を上映する番組で中心となる映画。
10）pp 121　増渕　健著　「B級映画　フィルムの裏まで」　平凡社　1986
11）貧乏通り　：小資本で活動する独立プロがあった区域を指す。主にリパブリック、モノグラム、ティファニー、リバティ、マスコット、マジェスティック、PRC、チェスターフィールドなどの独立プロが、ガウァー・ガルチ（これが“貧乏通り”と呼ばれた）およびその周辺にあったため、この呼び名がついた。1935年にリバティ、マスコット、マジェスティック、モノグラムの4社はリパブリックに吸収された[22)]。
12）pp 208　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983
13）http://www5b.biglobe.ne.jp/~info-pat/sub5.htm　「デジタル資料・参考文献」より
14）エクスプロイテーション映画　：お客が見たいもの（セックスや暴力）を売り物にして観客を食い物にする映画。エクスプロイテーションは、搾取・開拓という意味。
15）ロジャー・コーマン　：Roger Corman(1926-)「B級映画監督」や「低予算の父」と呼ばれる映画監督。
16）pp 202　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983
17）純B級　：「純B級」の表記は、語彙は多少異なってはいるが増渕健氏の著書「B級映画フィルムの裏まで」において使用しているので、本論でも使用させていただく。
18）フリー・ブッキング　：ブッキングは興行・出演の契約。また、映画の配給契約である。自由契約のこと。
19）pp 129　増渕　健著　「B級映画　フィルムの裏まで」　平凡社　1986
20）pp 63　ロジャー・コーマン／ジム・ジェローム著　「私はいかにハリウッドで100本の映画をつくり、しかも10セントも損をしなかったか－ロジャー・コーマン自伝」　早川書房　2003
21）pp 298　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983
22）pp 375　ジェイムズ・モナコ著　「映画の教科書」　フィルムアート社　1983
23）pp 82　岩崎　昶著　「現代の映画」　朝日新聞社　1965

参考資料・文献

欧文・和文に関わらず、著者のアルファベット順に並べた。
朝日新聞社「朝日新聞」　特集・シネマ　朝日新聞社　1992/11/15
双葉十三郎著　「米国映画史」　白水社　1951
ジョルジュ・サドゥール（Georges Sadoul）著　丸尾定・村山匡一郎／出口丈人／小松弘訳　「世界映画全史7、11」　国書刊行会　1997
飯島　正著　「世界の映画」　白水社　1953
イミダス編集部編集　「Imidas イミダス　2005」2005
井上一馬著　「米国映画の大教科書・上」　新潮社　1998
岩崎　昶著　「現代の映画」　朝日新聞社　1965
ロジャー・コーマン／ジム・ジェローム（Jim Jerome）著　石上三登志／菅野彰子訳　「いかにハリウッドで100本の映画をつくり、しかも10セントも損をしなかったか－ロジャー・コーマン自伝」　早川書房　2003

ジェイムズ・モナコ著　岩本憲児／内山一樹／杉山昭夫／宮本高晴訳　「映画の教科書 How to read a film」　フィルムアート社　1983
日本大学　「平成12年度　日本大学大学院芸術学研究科修士論文概要集」　日本大学大学院芸術学研究科　2000
増渕　健著　「B級映画　フィルムの裏まで」　平凡社　1986

●B級映画史年表

年代	
1897	エディスン　一連の訴訟を開始
1902	エディスン　特許訴訟敗訴判決
1908	エディスン　MPPCを設立　映画産業を独占する
1911	ネストール社がハリウッドに初の撮影所を建設
1912	MPPCとゼネラルが国内の上映機関の半分を手中に収める
	MPPCは反トラスト法違反と指摘される
1913	セシル・デミル監督作品ハリウッドロケ第一作となる
1914	第一次世界大戦勃発（～1918）
1915	MPPCが連邦裁判所で反トラスト法違反の判決
1917	MPPC消滅
1920年代	欧州は米国に対して海外市場の封鎖を行う
1929	世界大恐慌が始まる
1930	ユニヴァーサルがシリアルと低予算を量産
1931	ニュー・イングランドで二本立て興行開始
1933	大恐慌がピークになり、映画製作費削減、映画館の1/3が閉鎖する
1935	全国的に二本立て興行が行われる
1938	8大メジャー・スタジオが独占禁止法違反で地方裁から訴訟される
1939	第二次世界大戦（WW Ⅱ）が勃発（～1945）
	WW Ⅱにより物価が高騰し、低予算映画が量産される
1941	営業用のテレビ放送開始
1946	テレビ本放送開始
	ハリウッド映画の興行収入史上最高の17億ドルに
	パラマウントに対して劇場チェーンの分離命令
1948	テレビ・ブーム（～1952）　映画館の入場者数が減る
	トラスト法違反により映画会社の所有する映画館の売却命令発動
	「スタジオ・システム」に対して連邦裁ブロック・ブッキング禁止令
1951	映画会社が旧作のテレビ放送を開始
1950年代中頃	劇場チェーン分離の承諾命令を受ける。B級映画専門の制作会社倒産
	「スタジオ・システム」終焉
1957	テレビ普及で再び映画業界不況に
1960年代	低予算の独立制作会社が増える
1964	テレビ用に製作された最初の長編映画が放映される
1980年代初頭	映画市場の変化、映画産業の変化
1980年代末	家庭用ビデオの登場